

二〇二二年一〇月二十九日

大根に友の名のあり道の駅
こすもすに撫でられてをる力石
初鴨の小さき陣なす池真中
くわりんの実撒き散らしたる賽の神
ハロウィン逃げ出す猫を追ふ小魔女
公園のひと雨ごとに秋深む
晩秋や物干し竿の位置変ふる
古町の参道左右に菊の鉢

二〇二二年一〇月二十八日

人出より提灯多し秋祭
碧天や手摺り狭しと干す布団
後継ぎのなき家手入れ身にぞ入む
大落暉海峡を呑む島の秋
保母の笛木の実を拾ふ子らに鳴る
苔庭の紅一点は返り花
朴葉味噌焦がす暮秋を飛驒泊
一擲のパンに崩れし鴨の陣
雁の声落として川辺暮れにけり

二〇二二年一〇月二十七日

今日の月璧の波を照らしけり
天平の野辺訪ねゆく菊日和
薄ら日に冬菜輝く緑かな
露天湯に秋の星座をなぞる指
無事退院せし吾に庭の返り花
踏み場なき木の実木の葉の羅漢道

みきお ぼんこ なつき うつき 素 秀 満 天 明日香 智恵子 あひる 千 鶴 凡 士 凡 士 董 雨 なく子

勾玉の出でし墳てふ大花野

はぐれ鹿白き尻毛の震へをり

二〇二二年一〇月二十六日

抜きん出し園の一樹や百舌鳥の声
楼門の反りに反りたる秋の空
セコイアの葉擦れも園の秋の声
錦繡の連山空を染めんとす
朝窓を貫く鴨の鋭声かな
あきつ来てかしづくごとし磨崖仏

二〇二二年一〇月二十五日

粃がらの絨毯の田に一服す
間引き菜の小さき虫喰ひ愛しむ
日向ぼこ犬のイビキに猫パンチ

二〇二二年一〇月二十四日

埋め戻す遺跡を飛蝗飛びまはり
秋寂ぶや苔の首塚供華もなし
里芋の吹きこぼれたる長電話

二〇二二年一〇月二十三日

般若寺の土塀のくずれ身にぞしむ
けなし合ふ選挙演説うそ寒し
白妙の富士に手を振る尾花かな
コスモスの影纏れをる五輪塔
明王の憤怒慰む秋桜

やよい 千 鶴

やよい ぼんこ む べ せいじ 豊 実 もとこ

明日香 千 鶴 智恵子

なつき ぼんこ む べ

ぼんこ せいじ む べ 明日香 もとこ

毎日句会みのる選・二〇二二年一〇月二十三日